

ワークショップ：数学から心へ——ウィトゲンシュタイン哲学再考

提題者・題目（発表順）：

入江俊夫（文教大学）

「数学と心に関するウィトゲンシュタインの思考の連続性」

菅崎香乃（筑波大学）

「ウィトゲンシュタイン「心理学の哲学」最初期の思考」

岡本賢吾（首都大学東京・オーガナイザ）

「いかにして内的関係の「像（picture, Bild）」を作るか

—— 後期 Wittgenstein の数学の哲学」

ウィトゲンシュタイン研究が、近年、特に草稿分析の面でますます精緻な仕方で進展させられつつあるのに伴い、改めて明瞭となってきた点の一つとして、次のことがある。すなわち、一方で彼は、後期の仕事の中心を成す『哲学探究』の執筆のほぼ前半期に当たる期間（1930年代末から40年代中盤）に、数学の哲学に関する多量の草稿を書き継いでいたにもかかわらず、結局、それらの草稿は『探究』のうちにほとんど組み込まれることなく終わり、それだけでなく、これ以降の時期、彼は、狭義における数学の哲学を離れ、心の哲学ないし心理学の哲学と呼べる分野へとはっきり傾斜していったと考えられる、ということである。要するに、大まかに言って、『探究』執筆の前半期と、それ以降、晩年に至るまでの時期との間には、ひとまず「数学から心へ」とまとめることができるような、彼の関心の変化が見て取れるということに他ならない。

もちろん、以上のような整理が可能であるにしても、そうした転換の中で、彼が、それまでの仕事の文字通り中心領域を成していた数学の哲学に対して単純に興味を失ったとか、考察を放棄したと結論するのは早計だろう。また同様に、心の哲学・心理学の哲学への彼の関心が、まったく新たに生じたものであるかのように考えるのは正しくないし、またそもそも、ここで新たに浮上した心の哲学・心理学の哲学というものが、ふつう人がこれらの語の下で思い浮かべる種類の研究（日常心理学から素材を仰ぐ命題的態度の分析、心身／心脳問題の探究、等々）とどこまで同一視しうるかも決して明らかではない（おそらく、かなり異なると想定すべきである）。それはちょうど、彼の意味での数学の哲学が、ふつうこの語の下に人が理解するもの（数学の真理性の認識論的基礎付け、等々）と大きく趣を異にしていると類比的である。

では、結局、こうした変化が意味するものをどう捉えるべきなのか。——この問題は、さらに言えば、狭義のウィトゲンシュタイン研究にとっての関心事のみには決してとどまらないと考えられる。なぜなら、いまも述べた通り、ウィトゲンシュタインが実践した数学の哲学、そして心の哲学・心理学の哲学は、通常の意味合いでの数学の哲学、心の哲学・心理学の哲学ではなく、むしろ基本的には、そうした通常の意味合い自体に対する根本的批判であり、さらには、数や心についての何かまったく異なった新たな見方の提起であるからである。まさにそのために、彼の考えはいつでも解釈が困難であるとともに、数や心について、通念に妥協せず掘り下げた理解を持つようとする者にとっては貴

重なる洞察をもたらすものであり続けている。こうした点で、「数学から心へ」という転換を踏まえながら彼の軌跡の「不変な部分」と「発展していく部分」とを捉え直すことは、彼の思索に関心を抱く誰にとっても十分啓発的であると期待してよいだろう。今回のWSは、こうした目的に向けた最初の一步を踏み出そうとするものにすぎないが、特に、入江氏と菅崎氏という、現在のウイトゲンシュタイン文献研究の前線を担っている気鋭の提題者を迎えることで、その一步が、大変適切な、今後にも有効に繋がるものになるものと期待してよいと考える。